
勇者アルスくんの冒険

八草 頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者アルスクんの冒険

【Nコード】

N7371Y

【作者名】

八草 頼

【あらすじ】

それはアルスが十六歳になる誕生日の事でした。お母さんは言います。「アルス、私は今日この日のためにあなたをゆうかな男の娘として育てたつもりです」「娘違う！ 男の子だからね僕！」お城の王様は言います。「アルスが次のレベルになるには、36000ゴールド必要じゃ」「お金取るのかあ……。すごいなあ、汚いおっさんだなあ」アルスは見事魔王を倒せるのでしょうか。軽く読めて笑えるものを目指しています。

旅立ちの日

それはアルスが十六歳になる誕生日の事でした。

「おきなさい、おきなさい、わたしのかわいいアルスや……」

「ぶはぁッ！ とつくに起きてるよ！ 鼻と口塞ぐのやめて！」

「おきなさい、永久の眠りから」

「まだ死んでないよ！ 死にかけたけど！ 殺されかけたけど！」

「今日はあなたにとってとても大切な日です」

「ええ？ 何の日なの」

「今日は十五年前お母さんが処女を喪失した日です」

「知らないよ！ なんか生々しいからそういうのやめてよ！」

「まさか一発ではらむなんて……」

「いやいや、それだとなんかおかしくないかな時期的に……」

「はっ！ 今のは聞かなかったことにして！」

「もう遅い！ いろいろ怖いよ朝から！」

アルスはいきなり下ネタかよと先行きが不安になりました。私も

不安です。

「というのは冗談で、今日はあなたがお城に行く日です。私は今日この日のためにあなたをゆうかな男の娘として育てたつもりです」

「娘？ 僕男の子だけど」

「そのせいかなりシヨタっぽく育ちましたね。ちなみに魔王はふたなりが苦手です」

「困ったなあ、母さんがなにを言ってるかわからないぞ。あとでググってみよう」

「それには及びませんよ。それはつまりこういうことです……」ヨゴニヨ

母はアルスに教育をほどこします。彼女はアルスの疑問をすぐに解決してくれる、素晴らしい母親なのです。

「な、なんだよそれ！ そんなの普通苦手でしょ！？ 好きなのは一部の変な嗜好の人だけじゃないの！？」

「アルス、お父さんの悪口を言うのはやめなさい！」

「ええっ！ 怒られた！？ と、父さんがまさか……、どういうこと！？」

「そんなことはどうでもいいからさっさとお城に行ってください！」

母は急に怒り出しました。まるで嫌な思い出があったかのようで

す。

「どうでもよくないって！　すごいひつかかってるよ、喉に小骨が！　いや、アンカーぶちこまれた気分だよ！　このままじゃどこにも行けないよ！」

「しょうがないわねえ……。じゃ、ちゃんと行って来たらPSP買ってあげるから」

「え？　ほんと！？　うわーい、やったあ！　じゃいつてきまーす！」

「王様にちゃんとあいさつするんですよ」

こうしてアルスは意気揚々とお城に向かいました。

旅立ちの日（後書き）

こまかいツツコミはなしでお願いします。このお話はこつこつという感じです。

王様に会います

お城にやってきたアルスを王様が迎えます。

「よくぞきた！ ゆうかなるアレルのむすこスメシよ！」

「王様、僕はアルスといます。そんな握ったりちらしたり巻いたりするやつじゃありません」

「ゆうかな勇者であつた父の後を継ぎ旅に出たいというそなたの気持ち、しかと受け取つたぞ！」

「いえ、父さんはふたなり好きの変態だということがさつき判明しました。それに僕はP S Pでモン　ンをやる予定なので旅には出ません」

アルスはそう言いましたが王様はまったく聞く耳持ちません。ちよつと横文字が入るとでんでダメなのです。

僕も大人だし、しょうがない付き合い合つてあげよう、とアルスは老人ホームに手伝いにやってきた中学生のような気分で相手をすることにしました。

「見事魔王を倒したあかつきには、わが娘ミリア、三十八歳独身をおぬしの妻とする事を許そう」

「いえ、許さなくていいです。そこは禁止のままにしておいてください」

「まあそう恥ずかしがるでない。のうミリア」

王様の隣ではメガネをかけたブタさんが、生意気にも服を着ていました。

「えー、まあこの際文句は言わないけどあー、まだ子供じゃん？背も全然低いし」

「よかつたゝ、子供で」

「まあパパがどうしてもって言うなら考えなくもないけど？」

「王様、僕のことは気にしないでください」

「ミリア、このとおりじゃ！」

「やめろジジイ！」

娘に頭を下げる王様に、温厚なアルスも声を荒げます。ですが許してあげてください。彼にも人生というものがあります。

「これ！ 王様に対してその口の聞き方はなんだ！」

そこに大臣がやってきました。

「あ、ごめんなさいつい……。やっぱり人生がかかってくると熱くなってしまうて」

「ミリア様など恐れ多い。代わりにわたしの娘ローラをやろう。」

ローラ、来い！」

呼ばれて出てきたのは長身の女性。かなりの美女です。

「僕、やります。魔王をひねりつぶします」

「そうかそうか。ローラは男だがこの際問題ないだろう」

「やっぱナシの方向でお願いします」

アルスは父と違いいたってノーマルです。ただしどちらかというとロリ顔で貧乳、ツインテールにニーソックスは鉄板だと思っています。

それにツンデレが好物です。自分はMだと公言してはばかりません。そんな彼が、果たして本当に勇者になれるのでしょうか。

王様のおくりもの

「わしからの贈り物じゃ、そなたの横にある宝の箱を取るがよい」

たしかにアルスの横には不自然に宝箱が転がっていました。

アルスは宝箱を拾い上げます。ですが宝箱にはカギがかかっていました。アルスは宝箱を投げ捨てました。

「いらぬと申すか。ならその代わりにひのきのぼつとミリア、もしくはドラゴンキラーのどちらかをやろう」

「……うーん、悩むなあ」

アルスは二秒で答えが決まっていたましたが、悩むそぶりを見せません。彼はほんとうに賢い子です。

「ここは涙をのんでドラゴンキラーにします」

「ミリアを捨ててまで魔王を倒す力を欲するというのがじゃな。……うむ、その心意気、あっぱれ！ ついでにミリアもくれてやろう」

「いらねーよ！」

「貴様、王様になんと言っ口を！」

大臣がすかさずキレます。アルスはこのくだりさつきもやったな……、と思いつつも素直に謝ります。

「ごめんなさい。棒とセットで渡されたら撲殺してしまいそうだったので……」

「うむ、それもそうか。なら代わりにローラをやるう」

「い、……いりません」

アルスは一瞬迷いましたが、父と同じ道を歩むわけにはいきません。あとさりげに大臣がすごい暴言を吐いたな、とも思いました。

結局アルスはドラゴンキラーだけで勘弁してもらいました。

「とはいえアルスよ、おぬし一人ではすぐに魔王退治に飽きてしまいかもしれぬ。街の酒場で仲間を見つけ、これで装備を整えるがよろう」

チャリーン。王様はオーバースローで50ゴールド投げつけてきました。なかなかの強肩です。

「そしてこの部屋にいる兵士に聞けば旅の知識をおしえてくれよう」
ものすごいなげやりです。でもこれは本当にドラ エの王様も言ったセリフなのです。

「では行け、アルスよ！ 魔王を倒してまいれ！」

一方的に王様はアルスを旅立たせようとしています。もう王様は眠くなってきたのです。

「はいっ、行ってきまーすっ」

アルスは適当にいい返事をして流します。彼はさっさと帰ってモンをやる気バリバリでした。

彼の当面の敵は魔王ではなくリ レウスになるのかもしれませんが。

仲間を求めます。

アルスはお城を後にすると速攻で帰宅しました。

「母さんただいま！ P S Pは！？」

「あら、おかえりなさい。安心して、さっきアマゾンで注文しておいたわ」

「ホント？ ホントだよね！？」

「本当よ。本当だからその物騒な武器を突きつけるのはやめなさい」

アルスは興奮のあまりドラゴンキラーを母親の喉元に突きつけていました。あわててひっこめます。

「まだ届くまで時間がかかるでしょうから、その間に酒場に行つて仲間を見つけてらっしゃい」

「はあゝい」

P S Pのことになるとやたら聞き分けがよくなるアルスは、意気揚々と酒場に向かいました。

酒場についたアルスは、ナイスバディな受付のお姉さんにさっそく仲間を紹介してもらうことにしました。

「ロリ顔で貧乳、ツインテールにニーソックス装備でかわいい系のツンデレ魔女っ子をお願いします。レベルは問いません」

アルスはためらうことなく正直な願望を口にしました。

「うーん、その条件だと三人ね。10歳と16歳と45歳。どれがいいかしら」

アルスは悩みます。

本当はすぐにでも10歳と叫びたかったのですが、彼にも一応勇者としての体裁があります。ロリコン勇者の通り名はまだ荷が重すぎるのです。

それに45歳も逆に見てみたい気がしました。アルスは勇者になつてはじめての壁にぶちあたったのです。

「じゅ、16歳で」

「あら、そう。ちょっと待っててね。うふっ」

妖しげなウインクを一つすると、お姉さんはどこかに魔法電話をかけられました。

アルスはわくわくしながら待ちます。さながら風俗の待合室気分でした。

「はろー、アルス」

しばらくしてやってきたのはアルスの幼馴染のリリアでした。

なるほど言われてみればたしかに条件を満たしてはいますが、彼女はアルスを勇者として、いやときおり人として見ていないようなふしがあります。

同年の16歳をえらぶ時点で少しはかんぐるべきでした。

「チェンジで」

ドスッ！

チェンジコールむなしくアルスはおなかに痛みを感じたかと思うと、いつしかその場にうずくまっていました。

さらにその背中を足で踏まれています。ですが少し興奮しているのも事実です。顔を伏せながらもきわどくひるがえるスカートを盗み見ていました。

そつえば彼が に目覚めたのもこの子が原因なのかもしれませ
ん。

「誰をチェンジだつて？」

「ご、ごめんなさい。許して。僕はリリアちゃんを危険にさらした
くないんだよ」

と適当な理由をつけます。

いくら彼の性癖にドンピシャだとはいえ、やっぱりずっと一緒にいるのはキツイのです。アルスはこれまでに何度教会送りにされたことでしょうか。

「……あ、あたしだって、あんたが心配でここに登録したんだから。……ツインテールとニーソックスを指名してくると思って」

さすが、きつちりデレを決めてきます。ですがこの安いツンデレはアルスにとっては鼻で笑ってしまうレベルなのです。

「くふっ」

あつと、思わずばかにした笑いが出てしまいました。

「なに笑ってんのよオラァッ！」

ズシャッ！

アルスの延髄にかかと落としが決まりました。動画にとっておきたいぐらいキレイに決まりました。

アルスは力つきました。

また王様に会います。

「おお、アルスよ、死んでしまうとは情けない」

力つきた勇者アルスの転送先は教会ではなく王様の元になっていました。アルスはこれから何度このセリフを言われるのか想像しただけで鬱になります。

「聞けば酒場で女子のスカートを覗こうとしたとか。早くも勇者の片鱗を見せてきたようじゃな」

周囲から笑い声が聞こえます。

アルスはパンティではなく見えそうで見えないギリギリにこだわったと言いたかったのですが、変態性が増すかもしれないのでやめました。

「さて、アルスが次のレベルになるには、36000ゴールド必要じゃ」

聞いてもいないのに王様はかつてにしゃべりだしました。ですがこれぐらいしか仕事がないのです。

「お金取るのかあ……。すごいなあ、汚いおっさんだなあ」

アルスは王様の外道っぷりに感心しています。一人だけ資本主義に走っても、王様ならなにをしても許されるのです。

「アルスはどうかやら防御面に不安があるようじゃ。これで身を守るとよい」

王様はどこから取り出した盾を目にもとまらぬ速さでフリスビーのように投げつけてきました。

空を切りさく音とともにズガアツとすごい音がして、盾が柱につきささります。

アルスは柱にめりこんだそれを引っこ抜きました。なんとクリスタルの盾です。

これは高い防御力を持ち炎や吹雪にも強く、魔法にも耐性があるというすばらしい盾です。

王様のすさまじいツンデレ具合にアルスは強く心を動かされました。

リリアちゃんもこのぐらい見習って欲しいなあ、とぼやきながら、再びアルスはお城を後にしました。

「あつ、アルス〜！ だいじょうぶだった？」

お城の入り口でリリアがアルスを待ち構えていました。

「まったく、リリアちゃんのせいでハジかいちゃったじゃないか！」

「ごめんね、許して？ 怒らないで、おねがいっ」

リリアは上目づかいにアルスにすりよってきます。いつものパターンですが、アルスはリリアにかわいくお願いされると弱いのです。なぜならリリアの見た目はとてもかわいいのです。アルスも彼女から学校の男教師の視線が怖いと何度か相談されたことがあります。

「し、しょうがないなあ……。もうホントに気をつけてよね」

「ありがとつ。アルスってやさしいから好きよ」

にこりと笑うリリアにアルスはどきりします。彼もなんだかんだいってベタなのが好きなのです。

「んでさあ、それなに？ そのキレイな盾」

露骨に変わるリリアの態度にアルスはものすごくテンションが落ちました。ですがこれもいつものことなのです。

「こ、これは王様にもらったんだよ。これで『僕の』身を守りなさいって」

アルスは「僕の」と強調します。あらかじめ自分のものであることをはっきりさせておくのです。

「ふん。ねえ、ちょっと貸してみてよ」

「え、いやだよ」

「ちょっと見るだけよ」

「だからいやだって」

「貸せ」

「はい」

アルスは盾を献上します。これ以上ねばると手刀が飛んでくるのは過去の経験上あきらかだったからです。

盾で身を守ろうとも考えましたが、なぜでしょうアルスの頭にはクリスタルの盾がリリアの打撃によって粉碎される映像が浮かび上がりました。

「うれしいなあ、アルスがあたしにプレゼントなんて」

アルスはクリスタルの盾を奪われました。ですがこれもまた、いつものことなのです。

再び仲間を求めます。

アルスは仲間集めを再開すべくふたたび酒場へとやってきました。こんどはリリアも一緒です。

「ロリ顔で貧乳、かわいい系のツンデレ魔女っ子をお願いします。レベルは問いません」

アルスはしょうこりもなく受付のお姉さんにリクエストします。ですがこれでも彼なりに妥協したのです。

「ねえ、あなた。もう魔法使いが仲間にいるじゃない。それだとパーティーのバランスが悪くなっちゃうわよ？」

「僕の仲間はバトルマスターしかいませんけど？」

「誰がバトルマスターだって？」

アルスはリリアに右腕をねじり上げられました。

「さ、さっきの10歳の子をお願いします、10歳の子を！」

ギリギリと締め上げられつつもアルスは叫びます。

「ごめんなさいね、その子はもうほかのパーティーに入っちゃったから」

「そ、そんな！」

はじめから素直にそう言うておけばよかった、と後悔してもすでに後の祭りです。

「10歳の子ってなにかしらあ？　くわしく聞かせてほしいわねえ」

「ぎゃあああ！」

人間の腕というものはこうもねじれるものなのでしょうか。あたりにアルスの悲鳴がひびきわたります。

「おい、ちよつとうるさいぞ君達！」

見かねて注意したのは勇者カールでした。じつはアルスのほかにも勇者はわりといっぱいいます。

いくら王様がもうろくしているとはいえ、さすがにアルスのようなクソガキ一人に世界の命運を託しているわけではありません。

「あつ、ご、ごめんなさい。ほらアルス、謝りなさいよ、あんたのせいでしょー！」

「大変申し訳ございませんでした」

理不尽な要求ですがもうなれっこです。すでにアルスの謝りスキルは一流ホテルの支配人レベルにまで達しています。

「まったく、こっちは遊びでやってるんじゃないんだよ？　君達みたいな子供はおとなしく家でゲームでもやってなさい」

「はい、そうするつもりです」

本当にそうするつもりだったのでアルスはよどみない返事をしました。

ですがリリアがこそそとアルスに耳打ちします。

「ちょっと、あんなふうにいわれて悔しくないの？ あんたももう勇者になっただんでしょ？」

「ぜんぜん。むしろなんで僕が勇者なのかさっぱりわからないし」

「それは、あんたがあのアレルおじさんの息子だからでしょ！」

「……………なに？ アレルだと？」

勇者カールがそれを聞きつけます。それどころかリリアの声は酒場中に届いていました。

「あのガキがアレルの……………」 「まさか……………ということは」「バカな……………、信じられん」

部屋中にどよめきがおこり、なにやら雲行きが怪しくなってきました。

そんな中アルスは、PSPがいつ届くのか気になっていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7371y/>

勇者アルスくんの冒険

2011年11月23日20時49分発行